

## 一九三〇年代の建築界における「日本的なもの」の表現とその解釈をめぐって On the expression and interpretation of "Japaneseness" in the architectural world in the 1930s

○荒優花<sup>1</sup>, 田所辰之助<sup>2</sup>\*Yuka Ara<sup>1</sup>, Shinnosuke Tadokoro<sup>2</sup>

The 1930s is a period in which historicalism and modernism coexist. We will consider "Japaneseness" discussed at that time from each perspective. The flow of "Japaneseness" is organized by seeing how the "Japaneseness" that both sides have sought are interpreted and appearing as differences in expression. By reading the characteristics of "Japaneseness" that appeared in the 1930s, we explore the "Japaneseness" that were required at that time.

### 1. はじめに

「日本的なもの」1930年代は歴史主義とモダニズムが対立する時代である。昭和初期には双方が模索した「日本的なもの」が一つの形となって現れるが、そこに至るまでの過程を比較することで当時求められた「日本的なもの」を研究の対象とする。日本趣味や日本的性格、帝冠様式、和風コンクリート造など「日本」を指す言葉は数多く存在する。言葉の違いとして表れた「日本的なもの」に対する解釈や対象の違いを踏まえ、各時代が出した「日本的なもの」を探り、全体の流れを整理する。既往研究にある藤岡洋保の「昭和初期の日本の建築界における『日本的なもの』—合理主義の建築家による新しい伝統理解—」<sup>[1]</sup>では合理主義者側の「日本的なもの」にのみ触れられているが、昭和初期は歴史主義とモダニズムが併存しているため、二つを比較することで初めて当時の「日本的なもの」についてみることが出来るのではないかと。

### 2. 歴史主義による「日本的なもの」

歴史主義は明治43年の「我国将来の建築様式を如何にすべき」を皮切りに国民様式なるものを模索する。彼らにとっての「日本的なもの」は様式であった。過去の建築の中に「日本的なもの」を模索し、寺院建築や城郭建築などの意匠を組み合わせることで新様式を創造しようと試みる。大正では大江新太郎による明治神宮宝物殿をはじめとし、コンクリートによる木造表現が多くみられる。昭和初期になると一種の様式として帝冠様式や日本趣味建築と呼ばれるようになる。帝冠様式と日本趣味建築はまとめられることが多いが用いられる様式が異なる。帝冠様式では古典主義の躯体に日本風の屋根を乗せるのに対し、日本趣味建築は躯体から日本建築に見られる意匠から作られている。

### 3. モダニズムによる「日本的なもの」

帝冠様式や日本趣味建築はモダニストにとっては批判すべき対象であった。堀口捨己は「現代建築に表はれた日本趣味について」<sup>[2]</sup>の中にて、素材に適したデザインをするべきでありコンクリートによる木造表現は素直でなく、構造的に合理的ではないため近代建築の特徴が失われると主張している。また、彼らは過去に「日本的なもの」とされていたものが現在においても「日本的なもの」であるとは限らないと指摘し、現代の日本が持つ感覚や精神の中で作られる最先端のものの中に「日本的なもの」があるとした。建築の要素としては簡素・単純・明解など抽象的なものが「日本的なもの」の条件として抽出された。モダニズムの「日本的なもの」は歴史主義の様式のような共通認識がなく、思想や理念など個人の感覚に委ねられるものが多く、建築家によってその表現方法は異なる。坂倉準三による「パリ万博日本館」にてモダニズムによる「日本的なもの」のモデルが初めて示された。

### 4. 1930年代に表れた「日本的なもの」について

1930年代前半は大正までの流れの影響が強く残っている。歴史主義によって模索された新様式は日本趣味や帝冠様式という形で完成したが、徐々に入りつつあったモダニズムの影響が出始めたのもこの頃である。幾人かの建築家はすでに日本の古建築が持つモダニズム的性格に気づいていたが、1933年のB・タウト来日を待たねばならなかった。日本の古建築が持つ美しさやモダニズム的性格を指摘されること一気にモダニズム的な「日本的なもの」が広がっていくと、1930年代後半はモダニズムによる「日本的なもの」が様々な形となって提示される。過去の建築の再構成を行う者や要素のみを取り出す者、モダニズムに日本建築の皮を

1 : 日大理工・学部・建築 2 : 日大理工・教員・建築

被せる者などが現れる。時に歴史主義とモダニズムは対立しなければなかった。そのため全く異なるアプローチをしていると思われるが、平面やプロポーションなど計画の部分で参考にするなど共通する部分を見ることができる。

1937年に歴史主義では「東京帝室博物館」にて、モダニズムでは「パリ万博日本館」によってひとつの「日本的なもの」在り方が示さるが、素直に受け入れられなかった。ナショナリズムの高まりによる日本の伝統の見直しと海外から輸入されたモダニズムは排除すべき対象とされてしまったことが背景にある。その中で歴史主義とモダニズムの中間に立つ「日本的なもの」が求められ、建築家は正解が分からないまま新たな「日本的なもの」を模索する。堀口捨己は日本建築を近代的な視点から分析し、吉田五十八は日本建築を近代化させることで、近代的でありながら数寄屋や書院造の要素を持ち合わせた建築となった。対して、吉田鉄郎は日本建築の本質を建築によって体現しようと試みた。その結果、外国人の目を通すことで初めて「日本的なもの」と認識される表現となった。

5. まとめ

大正から昭和初期は意匠による「日本的なもの」の展開が行われたが、日本趣味建築や帝冠様式は過去の

築様式の組み合わせであり、折衷主義の名残であった。一方、モダニズムによる「日本的なもの」は感覚や精神性によるものであり、共通した特徴がないため認識の幅が広い。歴史主義による「日本的なもの」は昭和初期で終わりを迎え、モダニズムによる「日本的なもの」は昭和初期から展開が始まる。しかし、1937年以降は日本が戦争体制になるため、「日本的なもの」は主にコンペ案の中に留まる。

【参考文献】

[1]藤岡洋保「昭和初期の日本の建築界における「日本的なもの」—合理主義の建築家による新しい伝統理解—」『日本建築学会計画系論文報告集』第412号、1990年6月、pp.173-180[2] 堀口捨己「現代建築に表はれた日本趣味について」『思想』、1932年1月、pp.82-106[3] 井上章一『戦時下日本の建築家 アート・キッチュ・ジャパネスク』朝日新聞社、1995年[4] 近江栄『建築設計競技 コンペティションの系譜と展望』鹿島出版会、1986年[5] 藤森照信『日本の近代建築〈下 大正・昭和篇〉』岩波新書、1993年[6] 村松貞次郎『日本近代建築の歴史』NHK ブックス、1997年[7] 稲垣栄三『日本の近代建築—その成立過程—』中央公論美術出版、2009年[8] 堀口捨己、吉田鉄郎他「日本建築の様式に関する座談会」『建築雑誌』、1936年11月[9] 吉田鉄郎『建築家・吉田鉄郎の『日本の住宅』』鹿島出版会、2002年

